

下郷桑原遺跡

1984

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

# 下郷桑原遺跡

1984

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

## 目 次

I.	はじめに	(1)
II.	位置と環境	(2)
III.	調査の概要	(4)
IV.	検出の遺構	(6)
V.	検出の遺物	(12)
VI.	まとめ	(22)

## 例 言

1. 本書は、昭和58年に実施した広島県甲奴郡上下町・矢野地区農村総合整備モデル事業に  
係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は上下町より委託を受けて財団法人広島県埋蔵文化財調査センターが実施した。
3. 本書は銀治益生（I～V-2・b、VI）、伊藤 実（V-1、2・a）が分担して執筆  
し銀治が編集した。
4. 遺物写真は銀治が撮影した。
5. 遺物の実測・トレースは辻 満久・銀治が行った。
6. 本書で使用した造構略号は次のとおりである。 S B：住居跡、掘立柱建物跡、住居跡  
状造構、S D：溝状造構、S K：土塙、S X：不明造構
7. 第1図は、建設省国土地理院発行の50,000分の1地形図（上下・府中）を使用した。

## 図版目次

- 図版1 a 下郷桑原跡遠景（南西より）  
b 同 上 調査前近景（北西より）
- 図版2 a 下郷桑原遺跡構造検出状況全景（南東より）  
b S B13・14検出状況（南西より）
- 図版3 a S B13・14床面検出状況（北より）  
b 同 上完掘状況（北より）
- 図版4 a S B21検出状況（南西より）  
b 同 上完掘状況（北東より）
- 図版5 a S B01検出状況（北西より）  
b 同 上完掘状況（北西より）
- 図版6 a S D02遺物出土状況（南東より）  
b 同 上（北東より）
- 図版7 a S D02墨書き器出土状況（北東より）  
b S X09遺物出土状況（南東より）
- 図版8 a S X09完掘状況（北東より）  
b 下郷桑原遺跡完掘状況全景（南東より）
- 図版9 出土遺物（I）
- 図版10 出土遺物（II）
- 図版11 出土遺物（III）
- 図版12 出土遺物（IV）

## 挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図	(1:50,000)	(2)
第2図	遺跡周辺地形図	(1:1,000)	(4)
第3図	遺跡地形測量図(上)遺構配置図(下)	(1:400)	(5)
第4図	S B 13・14実測図	(1:80)	(6)
第5図	S B 21実測図	(1:60)	(7)
第6図	S B 01実測図	(1:60)	(8)
第7図	S D 02実測図	(1:40)	(9)
第8図	S X 09実測図	(1:40)	(10)
第9図	S X 18・S B 17実測図	(1:60)	(11)
第10図	S K 03・S K 10実測図	(1:60)	(11)
第11図	出土遺物実測図(I)	(1:3)	(13)
第12図	出土遺物実測図(II)	(16~21-1:2, 22・23-1:3)	(14)
第13図	出土遺物実測図(III)	(1:3)	(16)
第14図	出土遺物実測図(IV)	(1:3)	(17)
第15図	出土遺物実測図(V)	(1:4)	(19)
第16図	出土遺物実測図(VI)	(1:6)	(20)
第17図	出土遺物実測図(VII)	(1:3)	(21)

## (I) はじめに

広島県の北東部に位置する上下町は、旧石州街道筋にあたり古くより陰陽交通の要衝としてまた近世には天領として発展した山峡の町である。周辺部は狭い谷あいに開けた水田地帯を基盤とする純農村地帯で、町の南部の矢野地区には矢野温泉として古くより知られる温泉地があり、山間部の農村地帯の人々に憩いの場を提供している。上下町では、このような農村地帯としては格好の環境にある矢野地区に農村総合整備モデル事業の一環として、集会所及び多目的広場を中心とする矢野農村公園整備を計画していた。町当局は、昭和58年度着工をめざして、昭和57年2月、当該地の埋蔵文化財の有無ならびに取扱いについて、広島県教育委員会（以下県教委）と協議を行った。県教委ではこれを受けて、同年3月～11月にかけて踏査及び試掘調査を実施したところ広場造成予定地内から、弥生時代中期の住居跡、ピット、奈良～平安期と思われる瓦、須恵器等の包含層を検出した。遺跡推定範囲は、南西向きの緩傾斜面約1,300m<sup>2</sup>と推定され、県教委ではこれらの取扱いについて町当局に計画変更等により現状保存するよう協議を行った。しかし、町当局としては、他に当該事業の適地がなく、また盛土工法等による計画変更も当該事業の性格及び、丘陵上という地形的制約からも困難であるとして県教委と協議した結果、当該事業の予算的制約もあり、最大限に盛土工法を採用し遺跡を現状保存することとし、削平部分については記録保存の発掘調査を実施することとなった。なお、盛土工法によって現状保存とした地点には掲示板を立て、遺跡の所在場所を明示することとし、将来、改修等により、削平する場合は、発掘調査を行うこととした。調査は、(財)広島県埋蔵文化財調査センターが昭和58年9～10月にかけて実施し、調査対象面積は約600m<sup>2</sup>である。

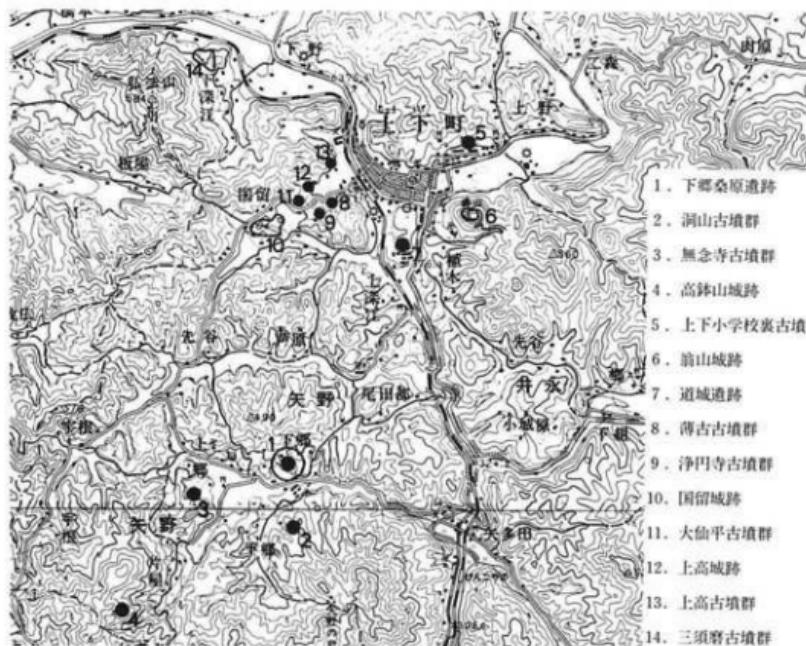
なお、調査にあたっては広島県教育委員会及び広島県草戸千軒町遺跡調査研究所の指導、助言を受け、上下町企画課ならびに、上下町教育委員会から多大の御協力を得た。また現地においては地元の多くの方々の御協力を受けた。末筆ながら謝意を表したい。

## (Ⅱ) 位置と環境

下郷桑原遺跡の所在する広島県甲奴郡上下町は、広島県北東部に位置し、備後國の備南、備北を結ぶ交通の要衝の地に当たる。上下町はいわゆる中位瀬戸内海面（吉備高原面）にあり、町の中央を分水嶺が走る。市街地中央を東西に貫流する上下川は馬洗川、江ノ川と合流して日本海に注ぐのにに対し、町の南側を南北に貫流する矢多田川は阿字川、芦田川と合流して瀬戸内海に注ぐ。また町全体の約86%は山地形を呈するため、小河川流域を中心に狭小な谷水田を数多く形成している。

ところで、上下町内の遺跡を概観すると、現在旧石器時代の遺跡は確認されておらず、最も古い時代の遺跡には縄文時代前～後期の土器片が採集されている扇原遺跡がある。<sup>(1)</sup>

弥生時代の遺跡には、今回調査を行った下郷桑原遺跡をはじめ、道城遺跡、中居遺跡がある。道城遺跡は上下市街地のやや南側の丘陵南斜面に立地し、弥生時代後期の住居跡1軒が確認されている。また中居遺跡は上下町階見に所在し、昭和58年に広島県教育委員会が実施した試掘



第1図 周辺遺跡分布図 (1 : 50,000)

調査によって、弥生時代中期後半の住居跡が確認されたものである。この他道路拡張工事に伴って試掘調査が行われた上下町国留の淨円寺古墳群の立地する西側丘陵谷部からは弥生時代中期と考えられる分鏡形土製品が出土した。<sup>(13)</sup>

古墳時代の遺跡では、約120基を数える古墳の存在が知られているが、住居跡や窓跡の存在については現時点では明確ではない。これらの古墳の大半は直径10m前後の円墳で、その内部主体は横穴式石室のものが数多い。なお、南山第1号古墳、古城跡第1号、第2号古墳は数少ない前方後円墳として知られている。<sup>(14)</sup>

上下町内で、発掘調査が行われた古墳には奈兵衛山古墳、上下小学校裏古墳、薄古第1号、第2号古墳などがあり、このうち奈兵衛山古墳は直径10mの円墳で横穴式石室を内部主体とし、須恵器、金環などが出土した。上下小学校裏古墳は墳丘の大半を失っており、わずかに横穴式石室の一部分と背面カットの周溝の一部分が検出されている。また薄古第1号古墳は墳丘の大半を失い、内部主体についても検出できず背面カットの周溝が検出されているのみである。第2号古墳については直径約7mの円墳で内部主体は箱式石棺1基及び、素掘り土塁1基であった。出土遺物はないが古墳の構造、構築法や内部主体の状況などから6世紀初頭の築造と推定している。<sup>(15)</sup>

古代の遺跡については今回の調査で下郷桑原遺跡から7世紀後半の遺構、遺物を検出したほかは、現時点では他に遺跡の存在は明らかではない。

中世の遺跡としては山城跡などが存在するが、そのうちとくに県史跡有福城跡や、翁山城跡は歴史的によく知られている。有福城は60×20mの本丸を中心に四方に小郭群を配したものである。城主は連久年間に土肥実平が居城したと伝えられ、その後南北朝期に竹内兼幸が居城している。また翁山城は上下市街地を臨む翁山山頂に位置し本丸を中心に2つ小郭を配している。城主は南北朝期に長谷部信吉が居城したと伝えられる。<sup>(16)</sup>

- 註 1. 服部宣昭、妹尾周三 「甲奴郡上下町扇原から発見された縄文時代の遺物について」  
『芸術』第6集 芸術友の会 昭和53(1978)年
2. 服部宣昭、妹尾周三 「甲奴郡における弥生時代の遺跡と遺物について」 『甲奴郡文化財研究』第2巻 昭和49(1972)年
3. 妹治益生 「甲奴郡上下町出土の分鏡形土製品」 『ひろしまの遺跡』第7号  
(財)広島県埋蔵文化財調査センター 昭和56(1981)年
4. 上下町教育委員会 「上下町の古墳分布」 昭和56(1981)年
5. 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 「薄古第1号・第2号古墳発掘調査報告」 昭和58(1983)年
6. 西本省三、葛原克人編 「日本城郭大系第13巻 広島、岡山」新人物往来社  
昭和55(1980)年

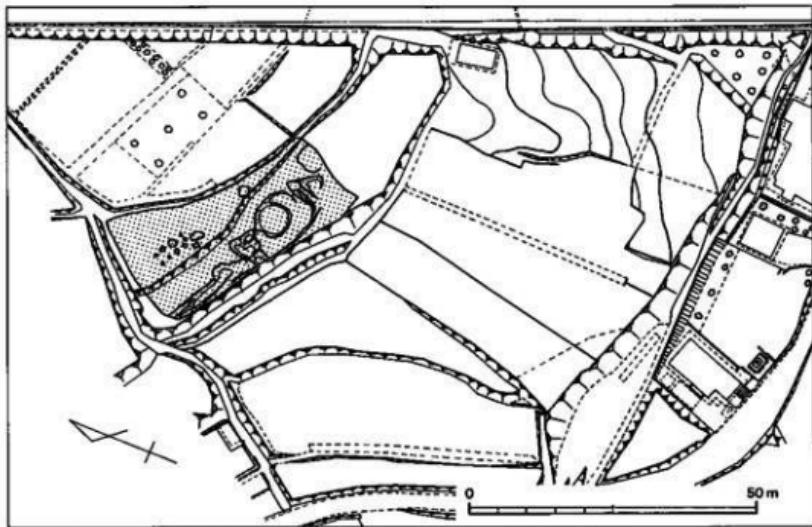
### (Ⅲ) 調査の概要

下郷桑原遺跡は、矢野地区中央を西から東へ流走する矢多田川支流河川の北側に位置し、標高約490mを山頂とする山塊の南麓派生丘陵上に立地する。遺跡は本丘陵の傾斜変換点よりやや南に下った標高400m付近の緩傾斜面上にあり、周辺の耕作面との比高差は約20mを測る。遺跡の立地する丘陵東側及び西側には小さな谷水田が貯入し、尾根幅は遺跡付近が最大で傾斜変換点に向けや幅が減少する。遺跡の周辺は畠地化が進行しており、遺跡付近ももとは桑畠であったが、現状では荒地化している。

調査は調査区域約600m<sup>2</sup>を8つの小グリッドに分割して行うこととし、尾根線にほぼ平行する形で調査区東・西辺のほぼ中央を結ぶ基線をまず設定し、西端部基点より10m間隔でポイントを設置し、各ポイントより東西基線に直交する南北基線をそれぞれ設定した。グリッド名は東西基線より北側をF区、南側をE区とし、東西方向では西側より1~4区と命名した。表土の排除作業は各グリッド間を幅50cmの土層観察用畦畔を残して重機を使用して行った。

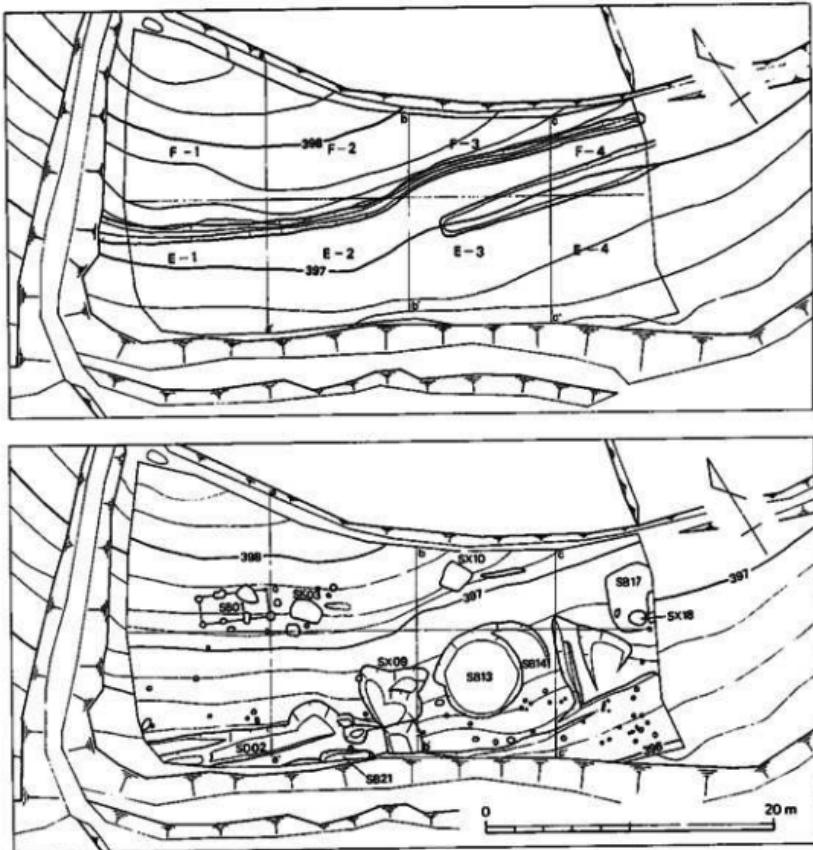
遺構検出面はF区側では表土層直下の地山面（花崗岩バイラン土）で、E区にかけては地山面（褐色粘質土）の直上に畠地化の際の客土が40cmほどあった。なおE区中央より南半部は地山上面に暗褐色土の瓦包含層を検出した。

調査の結果、本遺跡は弥生時代より平安時代初頭にかけての複合遺跡であることが明らかと



第2図 遺跡周辺地形図 (1:1,000) (アミ目: 調査範囲)

なり、検出した主要な遺構には弥生時代の円形住居跡2軒（S B13・14）、古墳時代の隅丸方形住居跡1軒（S B21）、平安時代の掘立柱建物跡1軒（S B01）、同時期の溝状遺構（S D02）、瓦溜り遺構（S X09）があるほか、時期不詳の土塙3基などがある。このうちとくに注目されるのはS D02及びS X09出土の遺物で、軒丸・軒平瓦・鬼瓦を含む古瓦類や、墨書き土器4点を含む須恵器類がある。しかしこれらの遺物は丘陵上方から流入した可能性があるが、丘陵上方部のF区にかけては地山面の削平が著しく、また同時期の遺構としてはS B01が存在するのみで瓦を架構するような構造物の存在は明らかにできなかった。



第3図 造跡地形測量図（上） 遺構配置図（下）（1:400）

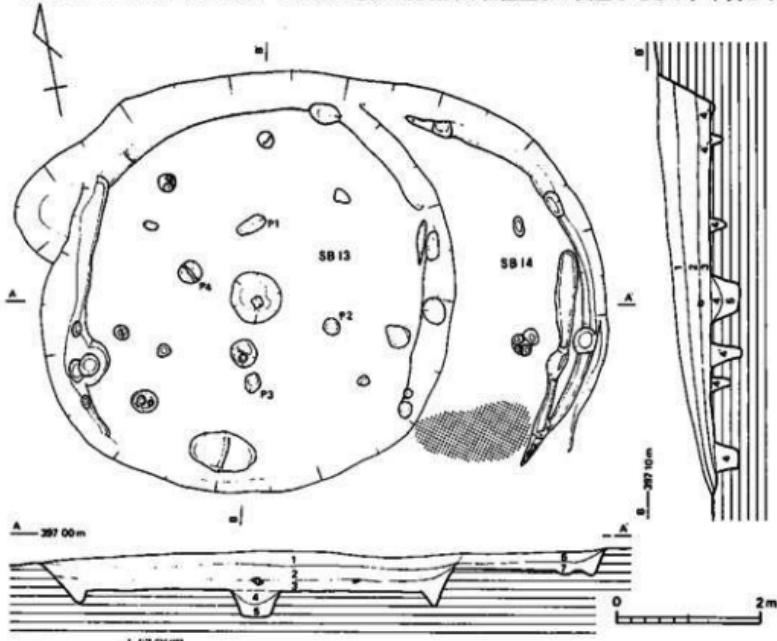
## (IV) 検出の遺構

### (1) 弥生時代の遺構

SB13 (第4図、図版2-b, 3).

E-3区より検出した住居跡で、東半部はSB14と切合の関係をもつ。SB13は径5.8mの円形プランを呈し、床面からの壁高は北壁で約75cm、南壁で約10cmを測り、北壁は床面より60°の角度で立上る。床面はほぼ水平で南壁寄りを除く壁際には幅10~20cm、深さ10~20cmを測る壁溝が廻っている。壁溝底面は浅いU字形を呈し、径20~30cmの小ピットが部分的にあるが、その配列には規則性は認められない。主柱穴は4本で、径20~30cm、深さ20~25cmを測る。主柱穴以外にも径10~30cmのピットを15検出したが、深さにばらつきがあり配列にも規則性は認められない。また住居跡中央で直径75cm、深さ40cmを測る中央ピットを検出した。

住居跡の覆土は黒褐色ないし暗褐色の粘質土で炭化物を下層ほど多く含む。また遺物は弥生中期後半の土器及び石器類で、大部分の遺物は住居跡床面上より出土したほか、中央ピット



#### 土層説明

- |                   |                      |
|-------------------|----------------------|
| 1. 暗褐色土 (黄色土を含む)  | 4'. 黒褐色土             |
| 2. 暗褐色土 (炭を多く含む)  | 5. 暗褐色土 (炭を多く含む)     |
| 3. 淡暗褐色土 (炭を少量含む) | 6. 暗褐色土 (黄色土、炭を多く含む) |
| 4. 黑褐色土 (炭を多く含む)  | 7. 黒褐色土 (炭を多く含む)     |

第4図 SB13, 14実測図 (1:80) (アミ目: 焼土面)

直上から砥石と考えられる石器が出土した。

なおSB13とSB14との関係はSB13がSB14の壁及び床面を切り込んでおりSB13が新しい。

#### SB14 (第4図、図版2-b, 3)

SB13に西半部の壁及び床面を切られた円形の住居跡で、南半部についても著しく削平されており、規模は明確ではない。床面からの壁高は北壁で53cmを測り、約60°の角度で立上る。床面はほぼ水平で、SB13の床面とは約35cmのレベル差を測る。壁際には幅15~20cm、深さ約10cmの壁溝が廻るが、東壁部では2条となり南端部が接合する。また壁溝は浅いU字形を呈し、溝中には径20~35cmのピットを2m間隔で3検出した。主柱穴及び中央ピットはSB13によって切られた部分にあったと思われ、現状では検出できなかった。また床面南端部では1.5×1.0mの範囲で強い火を受けた状況であった。

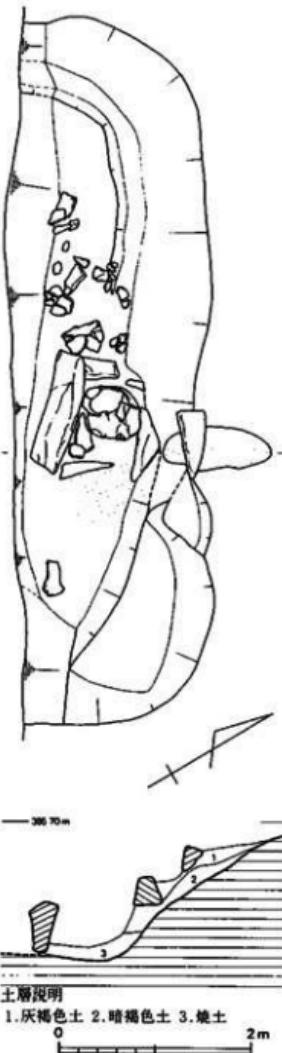
住居跡覆土は地山ブロックを含む褐色土と、暗褐色土で、遺物は少量の弥生土器が床面直上より出土した。SB13とはほぼ同時期のものである。

#### (2) 古墳時代の遺構

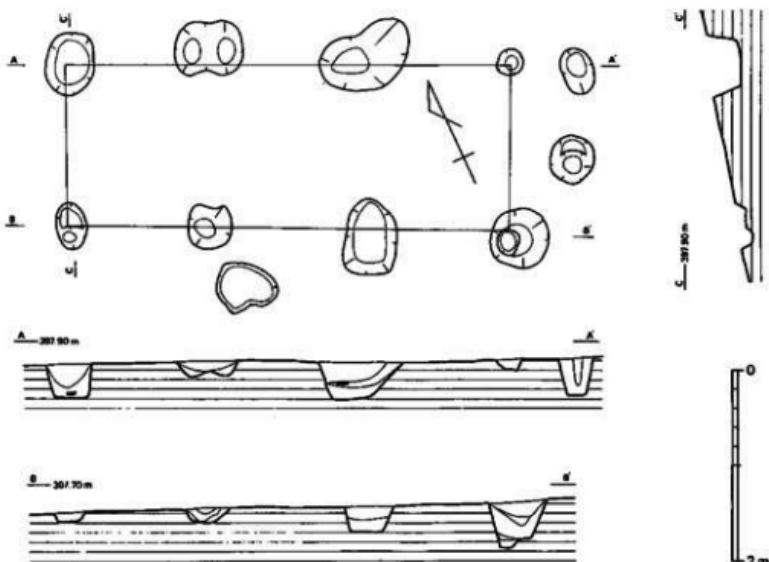
##### SB21 (第5図、図版4)

E-2区調査区南辺より検出した住居跡で隅丸方形プランを呈する。住居跡の北辺部のみの検出であるため全体の規模は明らかではない。北辺部は長さ約3m、床面よりの壁高は約55cmを測り、約45°の角度で立上る。北辺部東隅では壁面中位に半月形のテラス面をもつ。床面は大部分が調査区外にあるため詳細は不明であるが、北辺中央から西隅にかけて幅約15cm、深さ約10cmの壁溝が廻る。

本住居跡には北辺部中心よりやや東側に偏して石組みのカマドがあり、その規模は袖部で幅60cm、長さ



第5図 SB21実測図 (1:60)  
(アミ目: 焼土面)



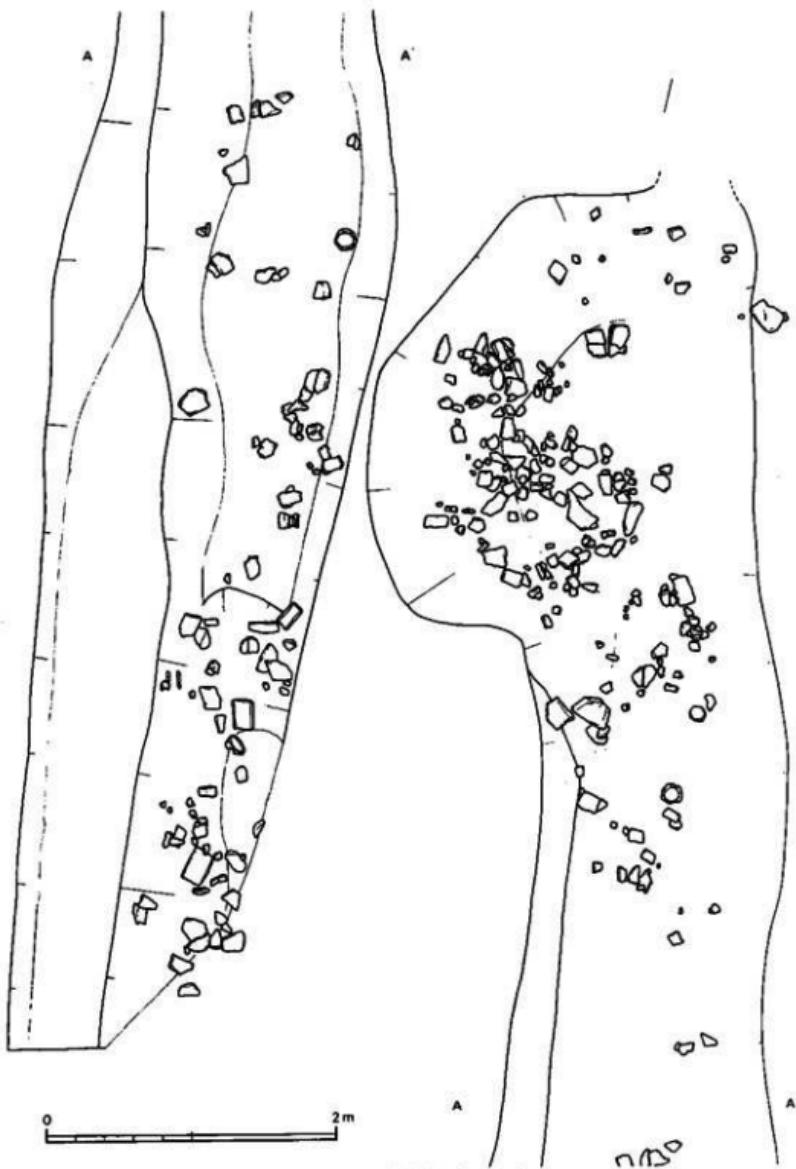
第6図 SB01実測図 (1:60)

70cm、煙道部では幅25cm、長さ50cmを測り、35°の傾斜で立上る。袖部は高さ約15cmの板石を両側に立てその上に長さ60cmの角礫をわたしており、煙道部入口付近にも2つの環を横にわたしている。袖部内面及び東側、煙道部底面は著しく焼成を受けており、袖部内側には上方より落込んだ状態で土師器變形土器が1個体分出土した。また袖部西側床面より土師器變形土器等が出土するが細片化しているため図示できなかった。

### (3) 平安時代の遺構

#### SB01 (第6図、図版5)

F-1・2区にかけて検出した1間×3間の掘立柱建物跡で、桁行4.6m、梁行1.8mを測り棟方向はN 66° Wを指向する。柱穴の大きさは直径25~90cm、深さは10~40cmでばらつきが目立つ。柱穴の位置関係はほぼ対応する位置にあり、柱穴間の距離は東西方向で1.6mを測る。各柱穴土層断面観察の結果では柱痕は認められず、灰褐色土を主体とする覆土で充填されていた。覆土中からは平瓦が数点出土しており、後述のSD02、SX09とほぼ同時期の建物跡と推定されるが、小規模であることから本遺構に瓦が伴うとするには疑問が残る。



第7圖 SD 02実測図 (1 : 40)

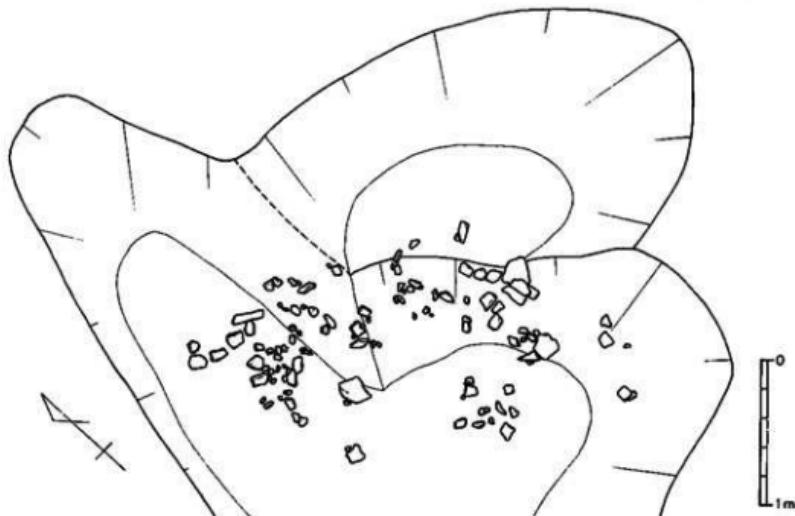
S D02 (第7図、図版6、7-a)

E-1・2区の調査区南辺部で検出した溝状遺構で、N 72° W方向に流走し、調査区内では長さ12.9mを確認したが、さらに西側にのびる状況を呈する。幅は西端部で1.8m、中央部で2m、東端部で2.7mを測り、東端部の北辺側がコ字形に拡張されている。溝の深さは北辺上場より西端部で80cm、中央部で75cm、東端部で80cmを測る。西端部は2段掘りになっており幅0.6~1mの平坦面を造出した後さらに掘込んでいるが、調査区南端のため底面の状態は不明である。一方中央部より東半にかけての底面はやや南側に傾斜しており、南辺立上りは約15cmを測る。

溝中の覆土は暗褐色土で数層に分層でき、また下層ほど炭化物の含有量が増加する。遺物には軒丸・軒平瓦をはじめとする古瓦類、墨書き土器を含む須恵器類があるが、その出土位置については底面よりかなり遊離しており、平面的には溝全域にわたって出土した。なお底面付近より出土したものの中に比較的大型の破片が含まれる傾向にあった。また瓦自体については磨滅が著しいうえ、かなり高いレベルからも出土していることから上方よりの流込みの可能性が考えられる。なお、本遺構の性格については調査区の端に部分的に検出したのみであり、現時点では不明と言わざるを得ない。

S X09 (第8図、図版7-b、8-a)

E-2区、S D02の東側約5.5m離れて検出した不整形な瓦溜り状の遺構である。規模は、東西長5m、南北長5.6mを測り、3段のテラス面を有する階段状であるが、テラス面の形状は



第8図 S X09実測図 (1:40)

不整形である。各テラス面のレベル差は約50cmを測る。本造構覆土はSD02同様の暗褐色土で、覆土上面付近より床面にかけ瓦類を包含するほか、須恵器類も出土する。本造構の性格についてもSD02同様明確ではない。

#### SX18 (第9図)

F-4区、調査区東辺部で検出した瓦溜り造構で、東辺部はトレンチのため切られており、残存長は $1.2 \times 1.1$ m、深さ3~5cmで上面はかなり削平を受けている。出土瓦は全て平瓦で、底面には密着した状態で出土した。

#### (4) その他の造構

#### SB17 (第9図)

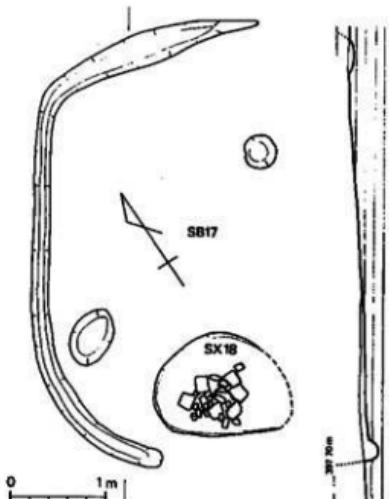
F-4区で検出した住居跡状の造構で上面削平が著しいため壁溝と思われる幅30cm、深さ20cmの溝をコ字状に検出し、西辺は約3.4mを測る。床面にはピット2を検出するが、主柱穴となるか不明である。出土遺物はない。

#### SK03 (第10図)

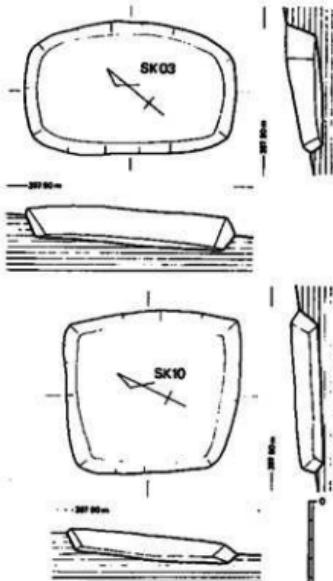
F-2区で検出した素振りの土塙で、規模は $2.2 \times 1.4$ m、深さ約30cmで、長方形プランを呈する。出土遺物はない。

#### SK10 (第10図)

F-3区で検出した素振りの土塙で、規模は $1.7 \times 1.8$ m、深さ約20cmを測る方形プランを呈する。出土遺物はない。



第9図 SX18, SB17実測図 (1:60)



第10図 SK03, SK10実測図 (1:60)

## (V) 検出の遺物

### (1) 弥生時代の遺物

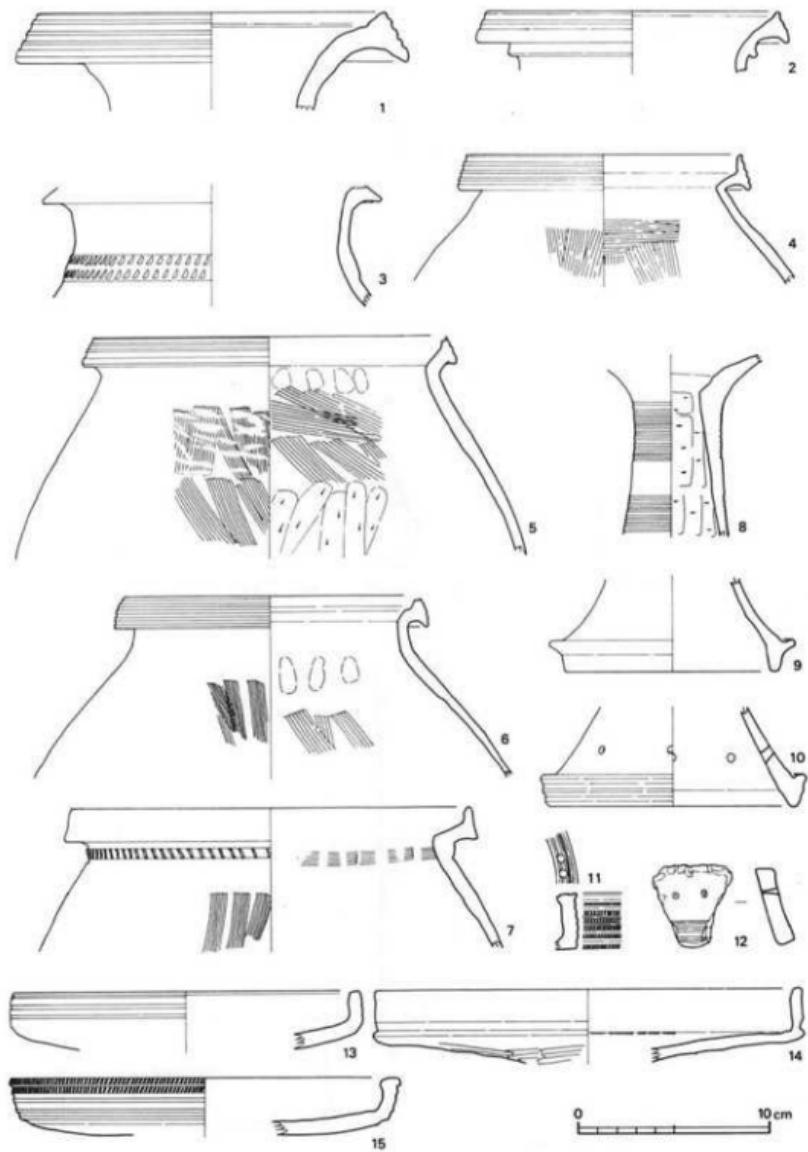
#### a) 弥生土器 (第11図1~15, 図版9-1~15)

主としてSB13から出土したものであるが高杯形土器の杯部(15)1点のみSD02出土のものである。器種的には壺形土器(1~3)、斐形土器(4~7)、高杯形土器(8~15)の三者がある。ただし、12は高杯形土器の脚部破片を転用した土製品の可能性が高い。以下に個々の形態的特徴を記すことにする。

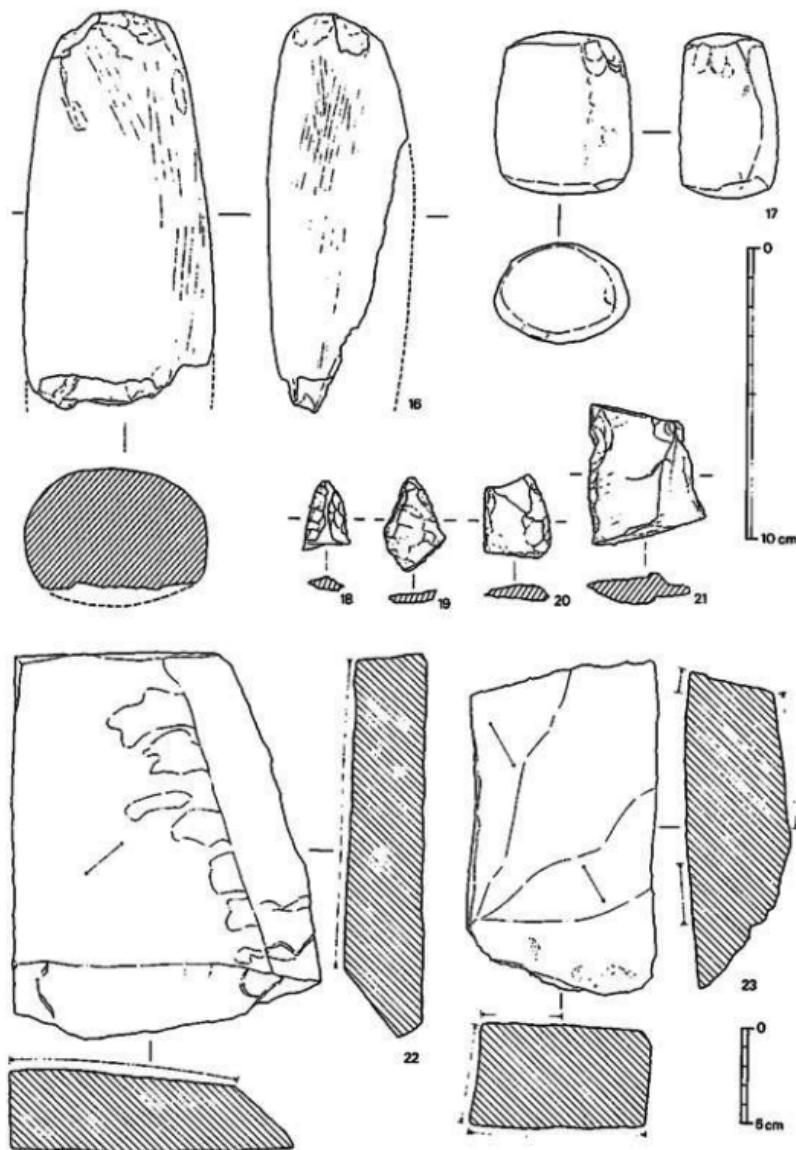
壺形土器(1~3)、1は口径18cmを測る口頸部破片で、口縁部は朝顔形に大きく開き、端面を下方に強く拡張して内傾する外面に4条の凹線をめぐらす。頸部外面にハケ目痕が観察されるが他は横ナデとする。2は口径15.1cmを測る口頸部破片で、口縁部は短く外反し端面を下方に強く拡張して内傾する外面に2条の凹線をめぐらす。口縁部直下に垂下ぎみの貼付け突帯1条をめぐらし、内外面とも横ナデとする。3は口縁端部を欠く口頸部破片で、直立ぎみの頸部に端部を上方に強く拡張する口縁部がつく。口縁端部外面の凹線の有無及び調整は器面が荒れており不明であるが、頸部下端に2条のヘラ割突文をめぐらす扁平な突帯を貼付ける。

斐形土器(4~7)、4は口径14.3cmを測る胴部上半破片で、口縁端部を上下に拡張してやや内傾する外面に4条の凹線をめぐらす。頸部はやや鋭く「く」の字状に屈曲し、胴部は球形に張り出す。胴部内外面はハケ目をのこし、他は横ナデとする。5は口径18.2cmを測る胴部上半破片で、口縁端部を上下に拡張して内傾する外面に3条の凹線をめぐらす。頸部はゆるやかに「く」の字状に屈曲し、胴部の張りは少なく長胴形を呈する。内面ヘラケズリは胴部上半まで、他はハケ目をのこし、口頸部は横ナデとする。6は口径16.3cmを測る胴部上半破片で、口縁端部を上下に拡張してやや内傾する外面に4条の凹線をめぐらす。頸部はやや直立ぎみとなりゆるやかに外反する。胴部はやや強く張り出す。胴部内外面はハケ目をのこし、他は横ナデとする。7は口径20.8cmを測る胴部上半破片で、口縁端部を上方へ強く拡張する。内傾ぎみの外面には凹線をめぐらすと考えられるが、現状では器面が荒れて観察できない。頸部は「く」の字状に屈曲し外面扁平な刻目突帯を貼付ける。胴部内外面にハケ目をのこし、他は横ナデとする。

高杯形土器(8~15)、8は脚柱部破片で、やや長めの脚柱部外面に12条の凹線文帯を2帯めぐらす。上部には杯部底面の円盤充填の痕跡(擬口縁)をのこし、内面はヘラケズリ、外面は横ナデとする。9、10は脚部で、ともに端部を上方に拡張して、外面に2条の凹線をめぐらすもの(9)と「く」の字状に屈曲して無文のもの(10)とがある。10には円形及び三角形の透し孔がある。調整は器面が荒れて内外面とも不明。11、13~15は杯部破片で、11は口縁部が直立ぎみに立上がり、上端面をやや拡張して3条の凹線をめぐらせ、円形浮文を貼付ける。外面には6条の凹線をめぐらせ、凹線間に細かな刻目を施す。13は口縁部をやや内傾ぎみに屈曲させ、外



第11図 出土遺物実測図(I) (1:3)



第12図 出土遺物実測図(II) (16~21-1 : 2, 22, 23-1 : 3)

面に3条の凹線をめぐらす。杯部内外面をヘラミガキ、口縁部内外面は横ナデとする。14は形態的に13に類似するが、口縁端部をやや外方に拡張し、外面に4条の凹線をめぐらし、上端に2帯の刻目文帯をめぐらす。15は口縁部を直立して杯部に貼付け、口縁部外面は無文である。口縁部と杯部の境はやや丸く外方に突出し、口縁部下端は、貼付け成形時の横ナデによって凹む。杯部内外面はヘラミガキとし、口縁部は横ナデとする。

土製品(12)高杯形土器の脚据部破片を転用した土製品と考えられるもので、器面に2ヶ所破面に5ヶ所の焼成後の穿孔(痕)が観察される。器面下端には本来の土器に施されていた3条の凹線が存在する。なお、転用後の用途は不明である。

#### b) 石 器 (第12図16~23、図版9—16~21, 10—22・23)

石斧(16)大型蛤刃石斧の破損品で、側縁部に研磨痕をのこす。

擦石(17)石斧(大型蛤刃石斧)を転用した擦石で、上下面に擦痕が明瞭に観察できる。

石鎌(18~19)18は凹基式、19は有茎の打製石鎌の破損品で、比較的大型であるが調整は粗雑で、器面に第1次剥離面を残す。

刃器(20~21)扁平な縦長の剣片を素材として、側縁に刃部をつくり出した不定形刃器で、大型のもの(21)と小型のもの(20)があるが、ともに調整は粗雑で、器面に第1次剥離面をのこす。

砥石(22~23)扁平な自然石を利用したもので、22は上面のみを、23は上下面と側面の3面を研磨面としている。22はS B 13の中央ピット上面から出土しており、台石と考えられる。

#### (2) 平安時代の遺物

主にSD 02、SX 09から出土したもので、土器では須恵器類がある。このうち高台付きの杯身底面に墨書のあるものが4点含まれている。この他には瓦類があり軒丸・軒平・鬼瓦をはじめに平・丸瓦がある。瓦類のうち軒丸・軒平瓦はともに同范又は同型式の范を使用している。

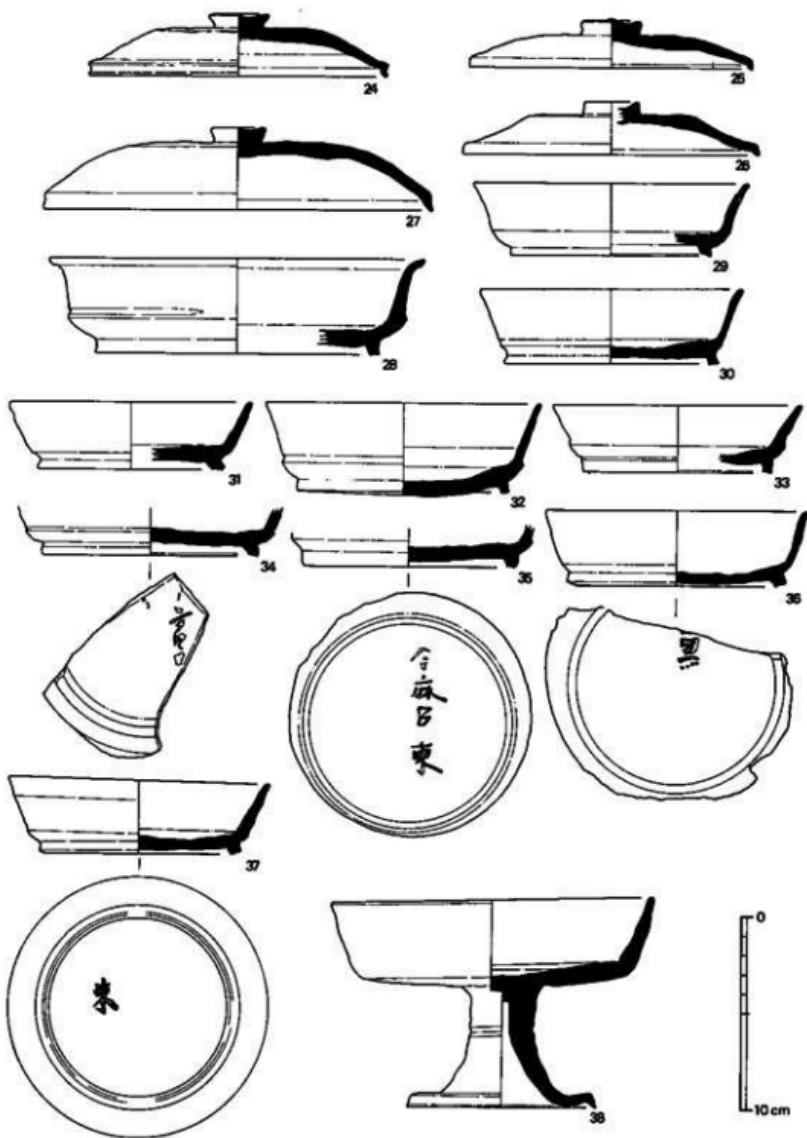
以上個々について記述したい。

(a) 須恵器 (第13図24~38、第14図39~45、図版10—24~32, 11—33~46)

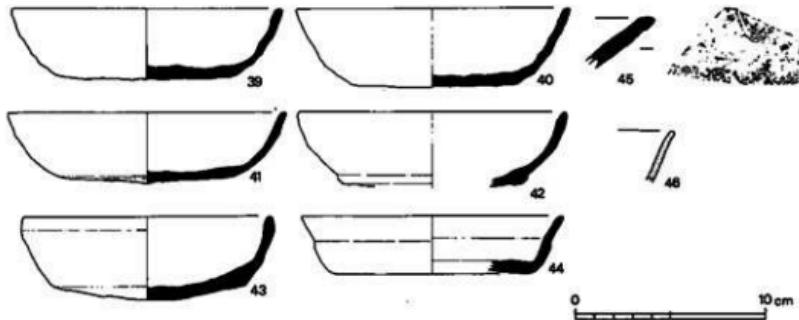
蓋(24~27)口径に大小があるが形態的にはほぼ同様の特徴をもつ。平坦な天井部に擬宝珠様のつまみを貼付け、口縁部はゆるやかなカーブを描いて端部はやや外開きぎみとなって尖る。端部の屈曲が比較的強いもの(24, 25)と弱いもの(26, 27)がある。調整は天井部外面をクロ削りとし、内面は不定方向のナデを行なうが、他はすべてロクロナデとする。淡青灰色~灰褐色を呈し焼成はよい。

杯(28~37, 39~44)形態的に貼付け高台をもつもの(I類)ともたないもの(II類)に大別される。またI類には外底面に墨書銘やヘラ記号等をもつものが存在する。

I類(28~37)口縁端部を外反させるやや大型のもの(28)と口縁端部を外反させないもの(29~37)の二形態がある。後者には、体部下端の底部との接合部に段を有するもの(32~35)があり



第13図 出土遺物実測図 (Ⅲ) (1 : 3)



第14図 出土遺物実測図 (IV) (1 : 3) (アミ目: 緑釉陶器)

この特徴は前者と共通するものである。高台部はすべて断面方形を呈し、「八」の字形に貼付けるものが多く、接地面はロクロナデによって内湾ぎみになるものが多い。調整は内底面は不定方向のナデとするが、他はすべてロクロナデとする。外底面はすべてヘラ切り離しの痕跡をのこす。34の外底面に「×」の字状のヘラ記号及び判読不能な墨書き、35には「舍麻呂東」の墨書き、36には「口黒」、37には「東」の墨書きが観察される。

Ⅱ類 (39~44) 体部が内湾ぎみに立ち上がるもの(39~43)と体部中央から外湾ぎみとなるもの(43)の二形態がある。前者には高台風の底部がつくもの(42)がある。調整はすべて内底面を不定方向のナデとし、他はロクロナデとする。外底面にはヘラ切り離しの痕跡をのこす。杯類は灰褐色~淡灰色を呈し焼成はよい。

高杯 (38) 口径16.7cm、器高10.9cmを測る完形のものである。杯部底面はほぼ平坦で、口縁部は外傾して直線的に立ち上がり、端部は丸くおさめる。脚部はゆるやかに開き、端部は丸く屈曲して外傾ぎみとなって尖る。脚柱部中央に一条の凹線をめぐらす。調整は杯部内底面を不定方向のナデとする以外はすべてロクロナデとする。灰色を呈し、焼成はよい。

甕 (45) 甕の口縁部と思われる破片で、口縁端部外面及びその直下に4本単位の櫛描波状文をめぐらす。口縁端部は平坦面をもち、調整は内外面ともロクロナデとする。灰褐色を呈し焼成はよい。

緑釉陶器 (46) 梗の口縁部破片で、灰褐色の素地に濃緑色の鉛釉をかけている。内外面ともロクロナデとし、硬質のもので焼成はよい。

#### (b) 瓦類 (第15図~第16図、図版11~47・48, 12)

軒丸瓦 (第15図47~51) いずれも8弁の複弁蓮華文をもつ軒丸瓦である。中房は小さく花弁と同一面上にあり、細い隆起圓線で囲み、中に1+5個の断面半円形を呈する蓮子を配する。

蓮弁は細い隆起帶で輪郭を作り、子葉は肉厚ぎみで基部が尖る。外区は2条の細い隆起曲線をめぐらせ、その間に22個の連珠文を配当し、外側は無文帯を作り出している。周縁は高く、平坦を呈していると思われるが、現状では丸くなっている。瓦当裏面には布目圧痕を残しているものもみられる。

瓦当部と丸瓦部との接合は、瓦当裏面に凹みを作り中に丸瓦を差し込み、上下に粘土を補充したものと、図示はしていないが瓦当面の器壁が薄く、同様の厚さの粘土円盤を裏面に付け、周辺部に丸瓦と粘土紐を貼付し固定したものの二者が見られる。これは両者とも瓦当部と丸瓦部の接合時の指頭圧痕がよく残っている。また使用している丸瓦はいずれも行基葺丸瓦で、残存しているかぎりでは凹面は布目圧痕、凸面は繩目圧痕の上を荒いナデが施されている。

色調は黒褐色～暗灰白色を呈しており、焼成は悪く特に瓦当面の剥落が著しい。胎土は多量の砂粒を含んでいる。50と51は外区連珠文に「横」がみられ、同一の範型を用いたものと考えることができ、他のものも同范または同型式の範型である。

軒平瓦（第15図52～59）いずれも均整唐草文をもつ軒平瓦である。内区は瓦当面中央に上向きのパルメット文様を配当し、唐草文は左右均等に施されていると考えられる。これはどの単位も2条を1単位として構成しており、1単位目は下向き、2単位目は上向き、3単位目は下向き、4単位目は上向きである。中心葉は1個、枝葉は6個配する。外区は隆起線をめぐらし上下両縁に25個、左右両縁に3個の連珠文を配当する。周縁は細い平坦面を呈している。

瓦当部と平瓦部の接合は、厚さ1～2cmを測る瓦当部を平瓦広側端に貼付したものと、薄い平瓦を2枚合わせたのちに瓦当部を広側端に貼付したものがいる。平瓦部凹面は瓦当部側3～4cmをヘラ削り、他は布目圧痕、凸面は繩目圧痕の上を荒いナデが施されている。

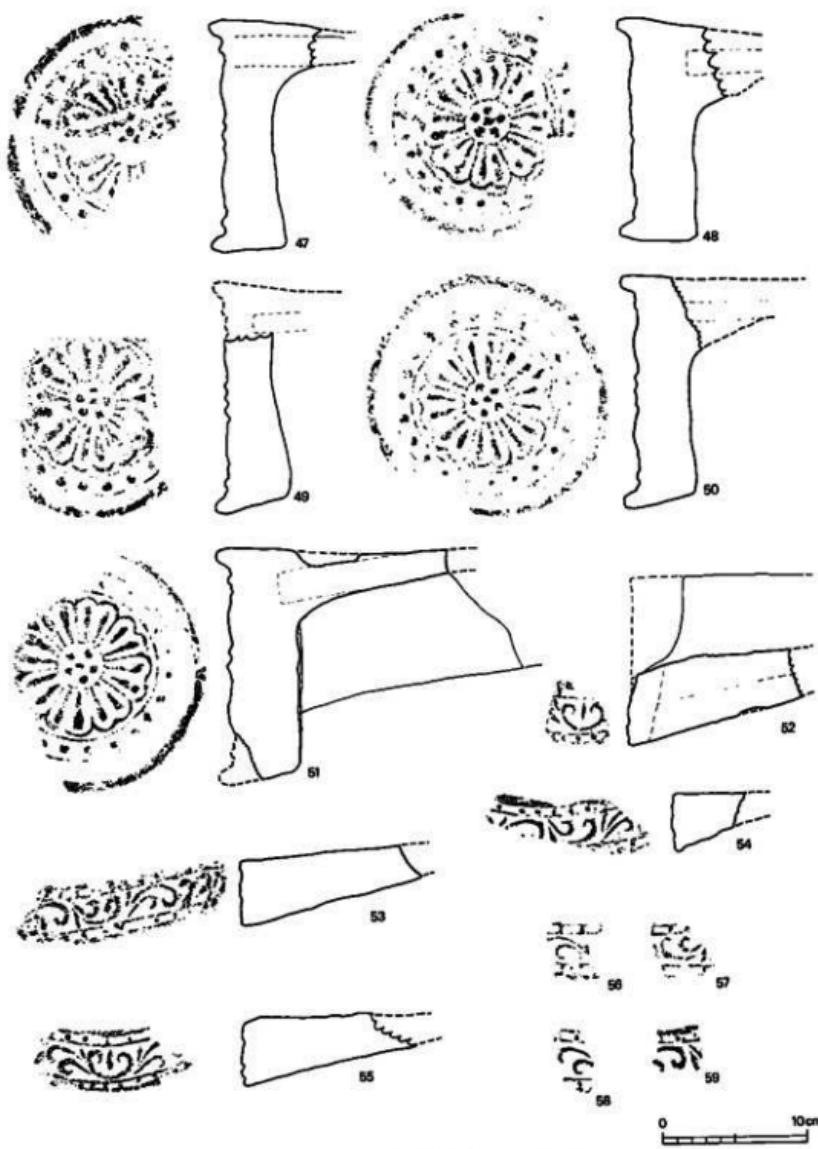
色調は黒褐色～暗灰白色・暗黄白色を呈しており、焼成は悪く特に瓦当面の剥落が著しい。胎土は多量の砂粒を含んでいる。出土した瓦はいずれも同型式であるが、破片・碎片が多く同一の範型の有無は明らかでないが、パルメット文様も有するものを比べると若干異なる点がみられる。このことより、範型は同一型式の範型が複数存在していたと考えられよう。

丸瓦（第16図60～63）瓦の形態により次の2種類に大別することができる。

I類（60～63）玉縁付丸瓦である。いずれも粘土板棒巻作りによって成形されているが、側縁ともに仕上げ面取りのうちナデが施されており、分割界線は明らかでない。玉縁部は凸面ナデと布目圧痕が施されている。凸面は全て繩目圧痕の上をナデ、凹面は布目圧痕がみられる。他に玉縁側を4～5cmほど削っているもの（63）もある。繩目は繩巻棒の回転押捺はなく叩きのみであり、原体は右捻りが多い。また、凹面には布をはずす際の引き紐圧痕が残るものがある。

色調は黒褐色～暗灰白色を呈し、焼成は良好なものと悪いものとみられる。胎土は多量の砂粒を含んでいる。

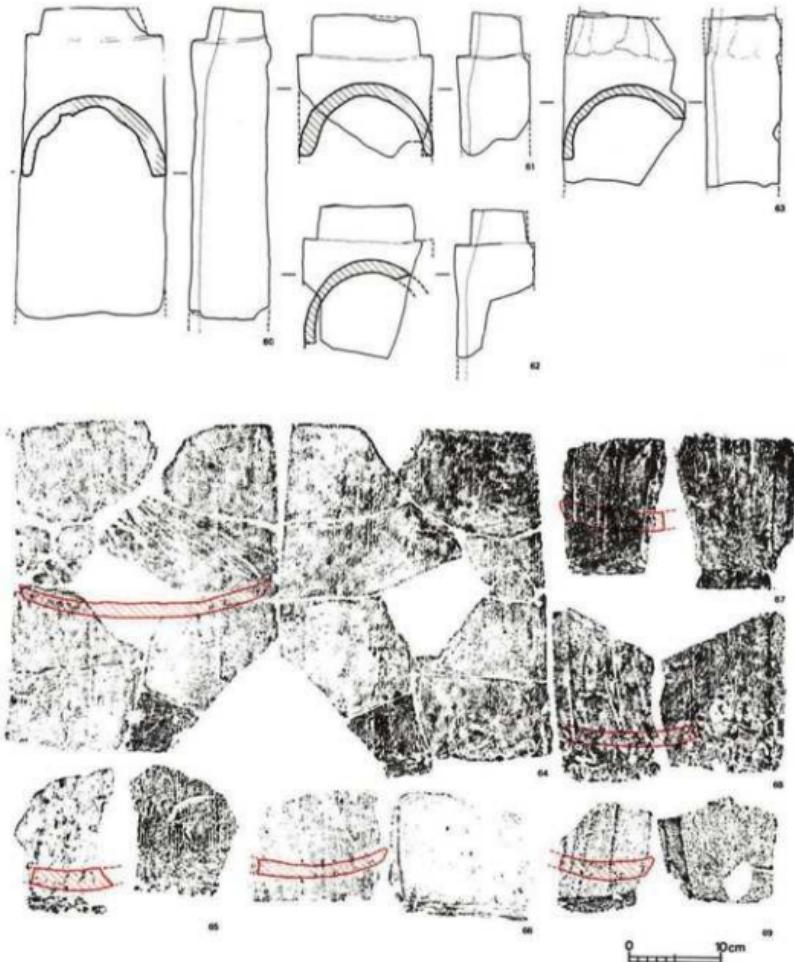
II類 行基葺き丸瓦である。図示はしていないが、数点存在する。成形・調整ともI類と同



第15圖 出土遺物實測圖(V) (1:4)

じである。

平瓦（第16図64～69）出土した瓦類のうち、最も多いものである。厚さは1.5cm前後のものと2.5cm前後のものの二者があるが、両者とも凹面は布目压痕または压痕の上をナデ、凸面は柵目压痕の上を荒いナデが施されている。使用された布は全て平織りであるが、経緯と側縁の



第16図 出土遺物実測図 (VI) (1:6)

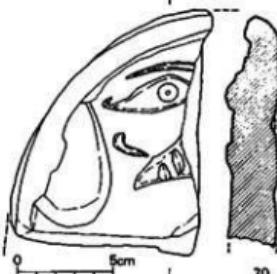
方向は一定の方向を保っていない。網目は例外なく右燃りの原体を使用しているが、二次調整のナデが強く網目が一部のみ残っているものも多い。

両侧面は仕上げ面取りののちナデ、狭・広両端面はナデを施している。なお凹面径と分割角度は乾燥段階におこる歪により計測是不可能であるが、桶巻作りはみられず全て一枚または二枚分割作りである。

色調は黒褐色～暗灰白色、暗黄白色を呈し、焼成は良好なものと悪いものがみられる。胎土は多量の砂粒を含んでいる。

鬼瓦（第17図）アーチ形の鬼板に鬼面文を表わした鬼面文鬼瓦である。口のみが残存している。口は細く、目を鋭く、いずれも粘土を貼付したもので、特に円形の瞳は突出している。鼻は下半が欠損しているが、高いと考えられる。周縁は若干高く平坦ぎみである。

色調は暗黄灰色を呈し、焼成は悪い。胎土多量の砂粒を含んでいる。。



第17図 出土遺物実測図（VII）（1：3）

## (VII) まとめ

今回発掘調査を実施した下郷桑原遺跡では、弥生時代中期後半の円形住居跡2軒、古墳時代の隅丸方形住居跡1軒、平安時代初頭頃の掘立柱建物跡1軒、溝状造構など当該地としては数少ない造構・遺物を検出した。とくに平安時代初頭の造構に伴う瓦類は当地域では初例である。しかしその造構の性格は必ずしも明確ではなく、今後の発掘調査例を待って再度検討することとし、今回の成果を整理しまとめとしたい。

上:下町内で弥生時代の住居跡が確認されている遺跡には本遺跡を含め、中居遺跡、道城遺跡があげられる。このうち本遺跡と中居遺跡は中期後半に属し、道城遺跡は後期に属する。しかし中居遺跡及び道城遺跡の場合試掘等による部分調査にすぎず、全容が明らかとなっているわけではないため、家屋構造等については不明である。これに対し本遺跡検出のSB13は円形プランを呈する4本柱の住居跡で、SB13によって切られるSB14もほぼ同時期の円形住居跡である。このような家屋構造をもつ遺跡としては三次塙町の塙町高校遺跡が近辺では類例としてあげられる。なお、三次市十日市町の高平遺跡、福山市駅家の池ノ内遺跡などでは方形住居跡や、円形の2本柱の住居跡の例があるなど、中期後半頃には家屋構造に様々な形態があったことが窺われる。

また、本遺跡、中居遺跡、道城遺跡の3者に共通している点は小さな谷水田に面した日当りの比較的良好な位置に立地することで、このことは当時の生産技術水準を示唆するものであり、本遺跡においてわずかに2軒の住居跡しか検出しなかったことを考え合わせると、当時の集団が小規模な人的構成で、狹小な谷水田経営を行っていたものと考えられよう。

古墳時代の住居跡SB21は調査区南辺で一部分を検出しただけであるため全容を明らかにすることはできない。なお造付けの石組みのカマドを付設するなど、三次市東酒屋町所在の松ヶ迫A・B・F地点検出の住居跡群との共通性が見出せる。本遺跡SB21の場合須恵器の出土はなく、図示できなかったが土師器の變形土器が出土した。しかし住居跡に造付けのカマドを付設するなど松ヶ迫遺跡群の住居跡と時期的には大差ないものと考えられる。

次に7世紀後半、平安時代初頭頃の造構には、1間×3間の掘立柱建物跡(SB01)があるが、柱穴が小さく、規模も1間×3間であり、倉庫的性格の造構であったろうと考えられ、瓦葺きの構造物であったとは到底考えられない。また瓦類が出土した溝状造構(SD02)及び瓦溜り状造構(SX09、SX18)などについては、SX18を除いて上方よりの流込みの可能性が考えられ、その性格については不明と言わざるを得ない。

当時の甲奴郡の状況についての文献史料はほとんどなく、初めて甲奴郡の名が現われるのは続日本紀に「和銅二年冬十月庚寅、備後国葦田郡甲努村……〈中略〉……仍割品遅郡三里隸葦田郡甲奴村。」とあり、このころに甲奴郡が設置されたものと思われる。また和名抄に矢野・

甲奴・田緑の3郷の名が見られるが、これ以上の詳細な記述は見当たらない。

ところで一般的に瓦を伴う当時の遺構として考えられるものは国府などの宮衙跡、寺院跡又は瓦窯跡があげられる。このうち宮衙跡の可能性については本遺跡の場合、当時の甲奴郡の中にはあって位置的に南側に偏しているうえ、陰陽を結ぶ主要交通路からも離れているなど条件が整っておらず、この可能性は薄いと言わざるを得ない。また寺院跡の可能性については、今回調査を実施した付近が本丘陵上においては最も尾根幅が広く、奥に向かって尾根幅は減少しており、また瓦が上方からの流込みの可能性があることなどを考えると大伽藍を備えた大規模な寺院としての寺域をとることは不可能である。ただし小規模な寺院跡であった可能性は捨て難い。一方瓦窯跡の可能性は調査区内においては一切窯跡と見られる痕跡がないため不明と言わざるを得ない。

最後に本遺跡出土の瓦類及び墨書き土器について触れたい。瓦類のうち、軒丸瓦類については本遺跡出土のものはすべて同范ないしは同型式の范型で作られたもので、8弁の複弁蓮華文をもつ軒丸瓦である。この瓦と同型式の瓦は福山市加茂町所在の岡遺跡、福山市駅町所在の最明寺跡、府中市父石町所在の父石遺跡出土のものがあり、高橋美久二氏の言う國分寺瓦系列軒丸瓦のⅡ6式にあたる。一方軒平瓦については、中央パルメット文様は山であり唐草文が左右に4転する均整唐草文をもつ軒平瓦で、本遺跡出土のものはすべて同一型式のものである。この型式の軒平瓦についての類例は備南地域には見当たらず、備南地域では先述の国分寺系列の軒丸瓦に伴う均整唐草文の軒平瓦は中央パルメット文様が山、または山で唐草文は3転しており、本遺跡出土の軒平瓦と文様構成の点で異なる。ただ本遺跡出土の軒平瓦は備南地域出土の軒平瓦の退化形態の1つとして捉えられるものであろう。

また墨書き土器については、検出した4点の墨書き土器のうちすべて文字の読み取れるものは1点でその他のものについては欠落等によって判読不能である。唯一読み取れるものについても「倉麻呂東」とあり、その意味についての解釈は明確とは言い難い。ただし判読不能の墨書き土器中に「東口」とある点や、平城京出土の墨書き土器中にも「東」と書かれたものが存在するなど「東」と言う文字に單なる方位を表現する以外の意味が付加されている可能性はある。

- 註 1. 松崎勇和「古代農村の復元」『大学人会研究論集(広島の農村)』第2集 昭和30(1955)年  
2. 広島県教育委員会「広島県三次市高平遺跡群発掘調査報告」「広島県文化財調査報告」第9集 昭和46(1971)年  
3. 広島県教育委員会「県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」昭和51(1976)年  
4. 広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財調査センター「松ヶ迫遺跡群発掘調査報告」昭和56(1981)年  
5. 広島県・岡遺跡発掘調査団「岡遺跡発掘調査報告書」昭和47(1972)年  
6. 高橋美久二「古代の山陽道」「考古学論考」平凡社 昭和57(1982)年



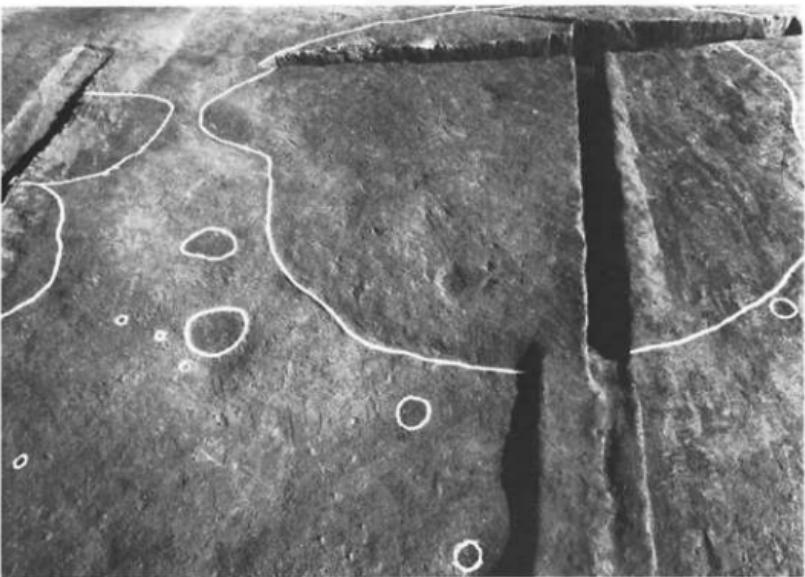
a. 下郷桑原遺跡遠景（南西より）



b. 同上 調査前近景（北西より）



a. 下郷桑原遺跡遺構検出状況全景（南東より）



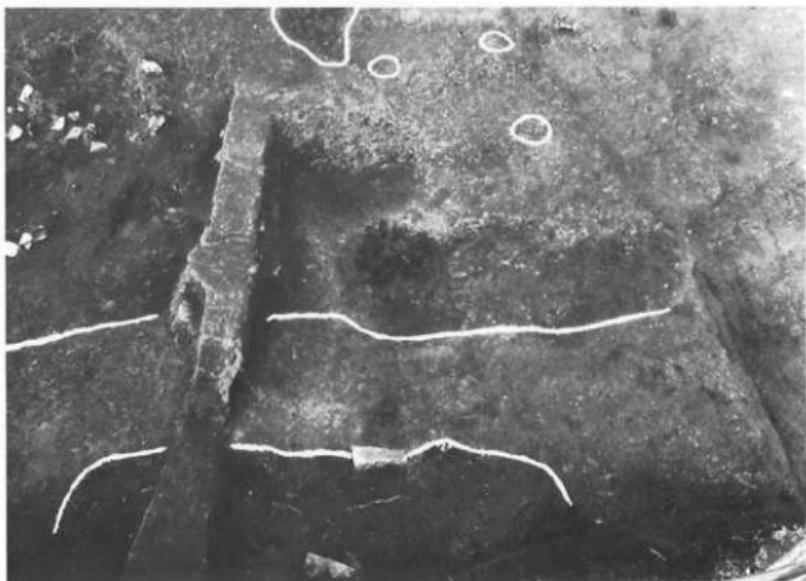
b. SB 13, 14検出状況（南西より）



a. SB 13, 14床面検出状況（北より）



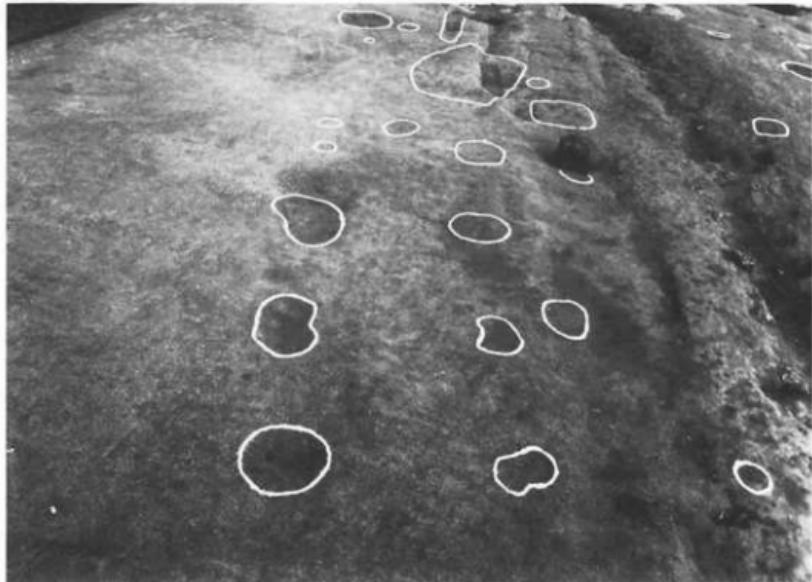
b. 同上 完掘状況（北より）



a. SB 21検出状況（南西より）



b. 同上 完掘状況（北東より）



a. SB01検出状況（北西より）



b. 同上 完掘状況（北西より）



a . SD 02遺物出土状況（南東より）



b . 同 上（北東より）



a . S D 02墨書き器出土状況（北東より）



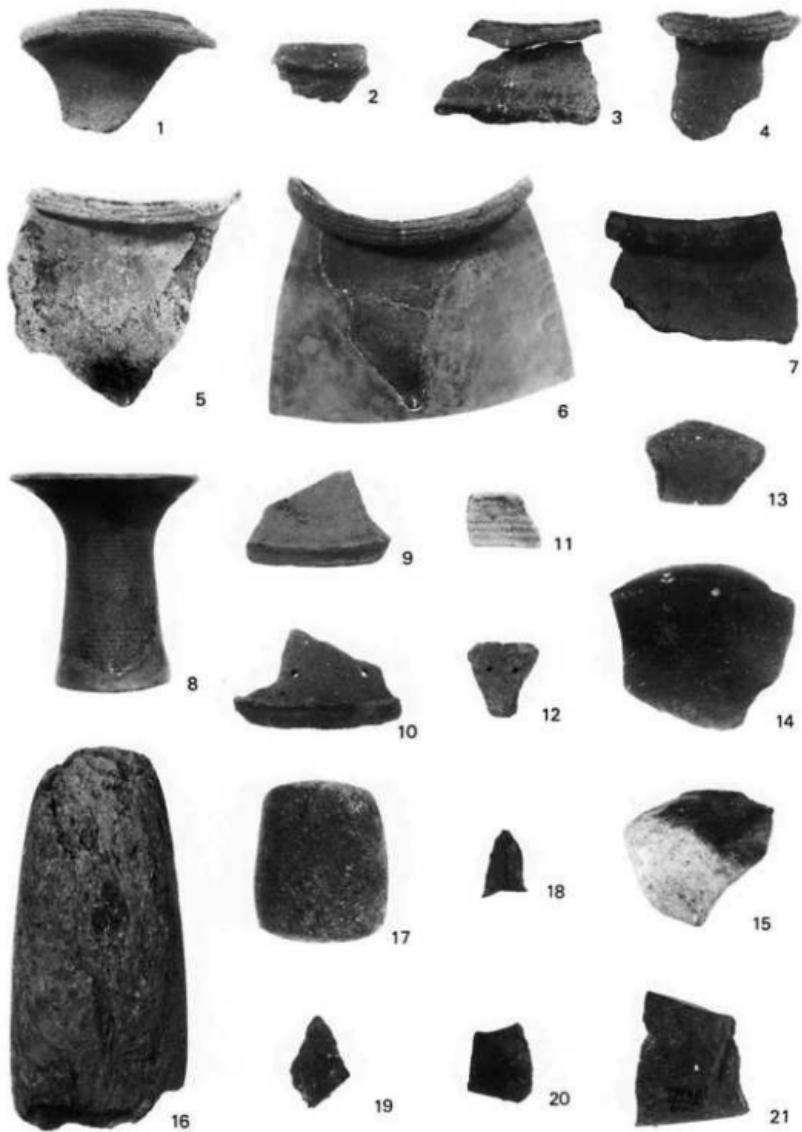
b . S X 09遺物出土状況（南東より）



a . SX 09完掘状況（北東より）



b . 下郷桑原遺跡完掘状況全景（南東より）



出土遗物 (I)



22



23



24



25



26



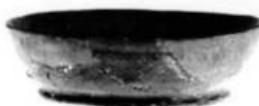
27



28



29



31

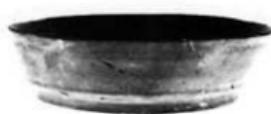


32

出土遺物（II）



33



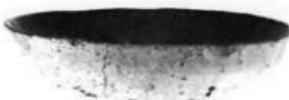
37



38



39



41



42



43



44



45



46

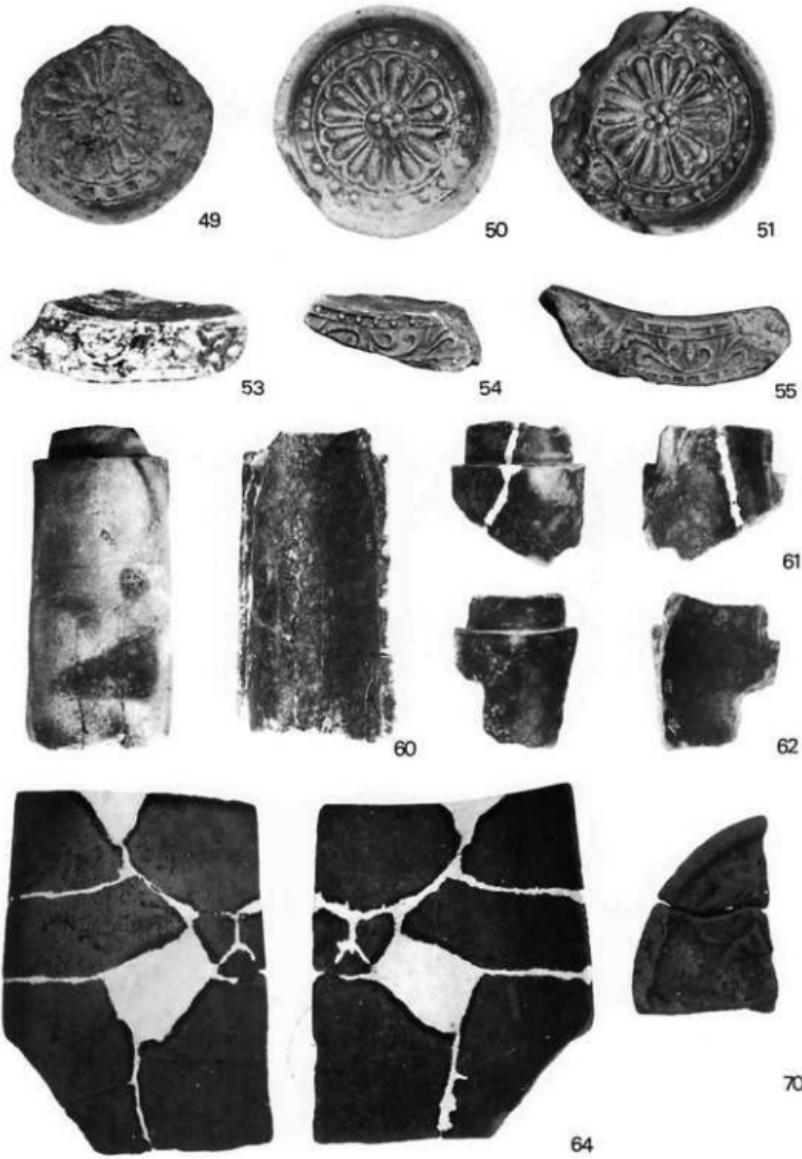


47



48

出土遺物（III）



出土遗物 (IV)

下郷桑原遺跡

昭和59(1984)年3月

編集・発行

(財)広島県埋蔵文化財調査センター

印刷 廣島中央印刷株式会社